題目：関係流動性は突出的向社会的行動を促進するか？

―社会生態学的アプローチによる国際比較研究―

氏名：市川玲

指導教員：結城雅樹

先行研究において、日本は他国に比べ、電車内で席を譲るなどの向社会的行動の頻度が低いことが明らかになった。しかし、先行研究ではその文化差の原因までは突き止めていなかった。そこで本研究では、向社会的行動を突出的と規範的の 2 種類に分け、各行動の文化差のパターンの差異を社会生態学的アプローチの観点から追究した。また、友人の存在により向社会的行動が促進または抑制されるか検討した。調査はオンライン質問紙上で行い、139 名のアメリカ人と 139 名の日本人に、通勤電車内でしばしば見られる突出的向社会的行動（妊婦に席を譲る）と規範的向社会的行動（他の乗客の邪魔になる場所から退く）について、それぞれ意思決定を迫られる場面のシナリオを読んでもらった。またシナリオでは、観察者としての友人の有無が、参加者間デザインでランダムに割り振られていた。その後、参加者は自身がその場に置かれた際の行動意図、社会や友人からの評判予測について回答した。分析の結果、まず突出的向社会的行動に関しては、予測通り、友人なし、あり条件の両方で日本人よりアメリカ人の方が行動意図が強かった。また、文化差の原因として関係流動性と称賛流通量が媒介し、関係流動性が高いほど称賛流通量が多く知覚され、そのことが突出的向社会的行動の高さに繋がっているとの予測通りの結果が得られた。一方、日本人は友人あり条件で席を譲った場合の友人からのネガティブ評判を期待し、突出的向社会的行動が抑制されるだろうという仮説は支持されなかった。規範的向社会的行動については、友人なし、あり条件のどちらにおいても日米差は見られないだろうという仮説とは異なり、両条件においてアメリカ人の方が日本人よりも有意に行動意図が強いとの結果となった。